The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	スタイルから見た新聞記事の名詞型述語文
Author(s)	安達, 太郎
Citation	現代日本語研究. 2017, 9, p. 8-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61384
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

スタイルから見た新聞記事の名詞型述語文

Stylistic Analysis of Newspaper Articles

安達 太郎
ADACHI Taro

キーワード：新聞、スタイル、ダ体、ダ終止、名詞終止

要　旨

文章日本語におけるスタイルに関して、新聞記事を対象として実施した小規模調査をもとに、ダ体を一貫して使用するテキストがもつ特徴を探った。結果として、新聞記事ではダ終止以上に名詞終止が多用されていること、ダ終止は助動詞的な名詞を述語とするときに使われる傾向が明らかになった。

1. はじめに

文中に表現されるていねいさにかかわる文法カテゴリーを本稿ではスタイルと呼ぶことにする。スタイルは非ていねい体（常体）とていねい体（敬体）の選択からなるが、話しことばと書きことばでは性質を多少異にする。

特定の聞き手が存在する話しことばにおけるスタイルは、聞き手との距離感の表現として機能する。聞き手との心的距離が近いと感じれば非ていねい体が選ばれるし、一定の心的距離が存在すると感じればていねい体が選ばれる。

一方、書きことば（司馬遼太郎(1976)に倣って文章日本語と呼ぶことにしよう）においては、手紙のように特定の読み手が想定されるものもあるものの、小説、評論、新聞などは不特定多数の「読者」に向けられて発信される。非ていねい体を基調とするこれらでは、さらにダ体（ダ終止とダッタ終止）とデアル体（デアル終止とデアッタ終止）が分化して、この使い分けによって、何らかの「スタイル的意味」が表し分けられると考えられる。

本稿の目的は、現代の文章日本語において、ダ体がどのような使用実態をもつかを明らかにすることである。研究対象としては新聞記事を取り上げること

にする。デアル体を用いないという点で、新聞記事はダ体で一貫して構成されたテキストの特徴を見るのに適していると判断されるからである。以下では、新聞記事に対して実施した調査の結果から、ダ体使用の実態について考えていく。

2. 文法カテゴリーとしてのスタイル

本節では、現代日本語におけるスタイルの基本的な特徴について確認しておくことにする。

図１はスタイルの体系を語例とともに示したものである。紙幅の都合上ここでは非過去肯定述語だけを示し、否定述語には適宜言及することにする。

		動詞述語	イ形容詞述語	ナ形容詞述語	名詞述語
非ていねい体	ダ体	食べる	暑い	元気だ	学生だ
	デアル体			元気である	学生である
ていねい体	デスマス体	食べます	暑いです	元気です	学生です

図１：文章日本語の非過去肯定述語のスタイル

図１からは次のようなスタイルの特徴を読み取ることができる。まず、文章日本語におけるスタイルは非ていねい体とていねい体の対立からなる点では話しことばを基盤とする「日本語」と同様であるが、非ていねい体にダ体とデアル体が分化する点が異なる。しかし、この分化が名詞述語とナ形容詞述語に限られる点にもあらためて注目しておきたい。しかも、ダ体とデアル体の違いは、否定述語では「{学生／元気} で（は）ない」のように同一語形の中に解消されるのである。

ていねい体に目を向けると、周知のように、動詞述語は「～ます」、他の述語は「～です」という異なる語尾をとる点で整然とした体系をなしていない。また、イ形容詞のていねい体の語形（「暑いです」）は、文章日本語での容認性はやや不安定に感じられる。さらに否定述語では、すべての述語が動詞的な「～ません」という語尾（「食べません」「暑くありません」「元気ではありません」「学生ではありません」）とイ形容詞的な「～です」という語尾（「食べないで

す」「暑くないです」「元気ではないです」「学生ではないです」）をとる。

ここで見てきた現代日本語のスタイルの特徴は一言で言うと語彙的性質が強く、その体系が過渡期的で、不安定であるとまとめることできる。以下の節では、新聞記事を対象として実施した調査を通して、このようなスタイルの体系の中でダ体が占める位置について考えてみたい。

3. 調査の概観

本稿では新聞記事を対象として分析を行う。新聞記事はダ体を一貫して用いるテキストであり、ダ体の性質を考える上で重要な資料となると考えるからである。

調査の概要は以下の通りである。データとしては『CD-毎日新聞 2006』（日外アソシエーツ）を用い、2006 年 9 月 1 日～10 日までの 10 日間を範囲として用例を収集した。

対象としたのは 1 面、2 面、社会面の全記事である。コラム、インタビュー、随筆などは記者が書く記事とはスタイルの上で性質が異なる可能性があると考え、これらを含みにくい紙面を対象とした。その上で、記事とはスタイル的に異質なテキストが含まれている場合はデータから取り除いた。結果として調査対象となったのは総記事数 403 本、総文数 3088 例である。

こうして収集した文には述語の品詞によって分類を施した。スタイル的な観点に立つ分析を行うため、名詞述語とナ形容詞述語を一括して名詞型述語と称する。他の述語についても動詞型述語、形容詞型述語と呼ぶことにする。

データを品詞別に概観すると次の表 1 のようになる。

表 1 ：品詞別概観

	用例数	割合
動詞型述語	2502	81.0%
形容詞型述語	50	1.6%
名詞型述語	426	13.8%
その他	110	3.6%
計	3088	100.0%

表 1 からは、新聞記事が圧倒的に動詞型述語からなるテキストであることが明確になる。動詞型述語は全用例数の 81.0%を占めており、名詞型述語が 13.8%でこれに次ぐ。形容詞型述語はわずかに 1.6%に過ぎない。

なお、「その他」には述語が省略された例や記事中の人物の発言などを入れているが、次のような例があることには注意しておきたい。

(1) 昨年 12 月 2 日、熊本市の熊本市民会館。日本エイズ学会のシンポジウムで、グレーのスーツ姿のパネリストが「薬害」を否定すると、医師ら参加者の多くがうなずいた。(9 月 1 日社会面)

(2) バイクで逃走し、山中で自殺した男子学生。同級生や近所の人々の男子学生に対する印象は「明るく元気」「礼儀正しい子」といったものが多く、評判は良かった。(9 月 8 日社会面)

文末の「熊本市民会館」「男子学生」という名詞は述語として文を終えているわけではなく、続く文の主題的な要素として場所や人物を提示する非述語的な用法である。本調査では「その他」として分類することにした。

ここで各品詞別にその内訳を見ておくことにしよう。まず、動詞型述語と形容詞型述語をそれぞれ表 2、表 3 として示す。

表２：動詞型述語の内訳

	用例数	比率
ル形	791	31.6%
タ形	1397	55.8%
φ	261	10.4%
否定	53	2.1%
計	2502	99.9%

表３：形容詞型述語の内訳

	用例数	比率
イ形	31	62.0%
タ形	18	36.0%
否定	1	2.0%
計	50	100.0%

形容詞述語については用例数が少ないため表を示すにとどめたい。動詞型述語については、タ形が 55.8%を占め、ル形の 31.6%よりもかなり高い数値を示しているが、事実を報道するという新聞記事の特徴からすると過去の出来事を扱った記事が多くなるのは当然のことだと思われる。否定（「～ない」「～なかった」をまとめたもの）が少ないのも、発生した事実の報道という新聞の役割

から理解することができる。

動詞型述語について注目しておきたいのは表 2 において「φ」という記号で表したものである。この記号は語尾が存在しないことを示しており、動詞型述語では次のようにサ変動詞の語尾が脱落している例がこれに当たる。

(3) ネットワークはこの調査に加え、家裁調査官や弁護士への聞き取りを実施。第三者による仲介支援が充実している米国も視察したうえで、その手法を参考に支援を始めることにした。(9 月 4 日 1 面)

(4) 自治会は数年前から対策を同町に要望。町は住宅地をパトロールし、庭木保護ネットを無償配布した。(9 月 3 日社会面)

この種の文は、形式的には句点によって独立した文となっているが、意味的には「聞き取りを実施し、～支援を始める」のように後続文との関係性が強い従属節に近いものとなっている。新聞記事は簡潔さを求められるため、複雑な文構造を回避する志向が強い。サ変動詞を述語とする動詞型述語文の場合、この語尾脱落によって、短めの文を連続させていくことから生まれる明晰性と意味的なまとまりから来る緊密性を手に入れる狙いがあるものと思われる。この発想は、名詞型述語の分析を行う際にも考慮に入れる必要が出てくる。

最後に名詞型述語を見てみよう。結果をまとめたものが表 4 である。

表４：名詞型述語の内訳

	用例数	比率
ダ終止	73	17.1%
ダッタ終止	50	11.7%
デアル終止	0	
デアッタ終止	0	
名詞終止	291	68.3%
疑問	7	1.6%
否定	5	1.2%
計	426	99.9%

注目するべき点はふたつある。ひとつはデアル体が存在しないことであり、この事実は、新聞記事がダ体で一貫するテキストを構成する特徴をもっていることを示している。もうひとつは、ダ体の使用が意外に少なく、28.8%（ダ終止 17.1%、ダッタ終止 11.7%）にとどまっているということである。これに比して、名詞終止が 68.3%という圧倒的多数を占めることが新聞記事における名詞型述語文の実態である。

一般的に、日本語の名詞については、名詞単独で述語を構成することができず、述語として機能するためには述語化形式（コピュラ、繋辞）が必要であると考えられている。(5a)のように「だ／である」といった述語化形式が付加されることで名詞型述語文として機能することになり、このような形式が存在しない(5b)は、会話では使われることがあるものの、文章日本語としては不適格になる。

(5) a.　京都は古都｛だ／である｝。

b. *京都は古都。

しかし、今回実施した調査から明らかになったのは、新聞記事では名詞終止が頻用されるという実態である。本稿では、この現象は、先ほど確認した動詞型述語文におけるサ変動詞の語尾脱落現象と同様、新聞記事に求められる簡潔性と緊密性を獲得するために発達した独自の語法ではないかと考える。以下の節では、今回の調査結果にもとづいて、新聞記事においてダ終止と名詞終止がどのように使い分けられているかを考えていくことにする。

4. 名詞型述語の終止の語形

本節では、調査結果にもとづいて、名詞の意味とダ終止、名詞終止の選択との関係を見ていくことにしたい。用例の検討は次節以降に行うこととして、ここでは数量的な偏りから大まかな傾向を探ることにする。

本調査で得られた名詞型述語は 426 例だったが、これから疑問（7 例）と否定（5 例）を除いた 414 例を対象として、名詞の意味にもとづいて分類した。名詞分類としては、普通名詞、形式名詞、文末名詞、性状名詞に分けることとした。形式名詞は「から、こと、ため、とおり、もの、よう、…」といった、意味が形式化した名詞であり、文末で用いられたときは助動詞的な性質を帯び

ることがある。文末名詞は形式名詞よりは具体的な意味をもつものの、主語名詞との同一性を表さず、文末では助動詞的な性質を帯びやすいものである（新屋(1989)、角田(1996)などを参照のこと)。ここでは「意向、疑い、形、実態、方針、見通し、…」といった名詞を文末名詞に分類した。性状名詞はナ形容詞語幹と「～がち」のような接尾辞を入れるためにたてたものである。その他の実質的な意味をもつ名詞は普通名詞として分類した。

普通名詞と性状名詞は「ＸはＹ｛だ／だった／φ｝」のように述語名詞が主語名詞との同一性を表したり、主語名詞の性質を表したりといった、主語名詞に対する叙述を行うものである。一方、形式名詞と文末名詞は「……Ｙ｛だ／だった／φ｝」のように、述語名詞は主語名詞との叙述を表さず、文法的な意味をもつ助動詞に近い機能をもつものである。

このような観点を頭に置いて、表 5 で名詞分類と終止法の関係を見ていくことにしよう。

表５：名詞の意味的性質と終止の語形

	普通名詞	形式名詞	文末名詞	性状名詞	計
ダ終止	10	27	28	8	73
ダッタ終止	41	4	3	2	50
名詞終止	207	14	63	7	291
計	258	45	94	17	414

終止の語形の観点から表 5 を見ることにする。ダ終止については、全 73 例のうち、助動詞的な名詞が 75.3%（形式名詞 27 例、文末名詞 28 例）を占め、主語に対する叙述を表す名詞は 24.7%（普通名詞 10 例、性状名詞 8 例）にとどまる。一方、名詞終止は主語に対する叙述を表すタイプが主となり、全 291 例のうち、73.5%（普通名詞 207 例、性状名詞 7 例）を占める。助動詞的な名詞は 26.5%（形式名詞 14 例、文末名詞 63 例）である。この結果は、「ＸはＹ」型の典型的な名詞型述語文の構造をもつタイプは名詞終止に偏り、文法機能を表す場合はダ終止に偏るというはっきりした傾向を示していると言えよう。

ダッタ終止の振る舞いは特徴的である。ダッタ終止は、主語に対する叙述を

表す名詞が全 50 例のうちの 86.0%（普通名詞 41 例、性状名詞 2 例）、助動詞的な名詞が 14.0%（形式名詞 4 例、文末名詞 3 例）となり、主語に対する叙述を表す名詞に偏ることがわかるが、これは、ダ終止の傾向よりも、名詞終止の傾向に近いものである。ダッタ終止はダ終止だけでなく、名詞終止に対応する過去形でもあるということがこのような結果に結びついているものと思われる。

本節では、量的な観点から、主としてダ終止と名詞終止の用例の偏りについて観察した。その結果、ダ終止は形式名詞や文末名詞といった助動詞的な名詞と結びつきやすく、「ＸはＹ」型の典型的な名詞型述語文を構成する普通名詞は名詞終止をとりやすいという明確な傾向を確認することができた。次節では用例の検討を通してダ終止と名詞終止の使用実態について観察を深めていくことにする。

5. ダ終止と名詞終止の比較

本節では、述語名詞の意味分類に従ってダ終止と名詞終止の使用実態を見ていくことにする。4 節では表 5 を終止の語形の観点から見たが、ここでは述語名詞の側から見ていくことになる。以下ではまず量的な傾向を指摘した上で、新聞記事の用例の検討に移るという手順で進めていく。

5. 1. 普通名詞の場合

普通名詞はデータ中に 258 例見られたが、そのうちの 207 例（80.2%）が名詞終止をとっており、ダ終止をとるものはわずか 10 例（3.9%）に過ぎない。「ＸはＹ」型の典型的な名詞型述語文を構成する普通名詞では名詞終止が支配的であると言える。

名詞終止の例を見ていくことにしよう。なお、以下の例ではダ終止と名詞終止を並置して示すことにする。左側が用例で使われている形式、右側が対比のために示す形式である。名詞終止の場合は「φ」という記号で示す。

次の例は用例では名詞終止をとっているが、ダ終止であっても容認性は高いと思われるものである。

(6) 病院によると、男性は福井県在住の 20 歳代の会社員｛φ／ダ｝。8 月 7 日、仕事中にけいれんや意識障害を起こして緊急搬送され、脳炎と診

断された。(9 月 10 日社会面)

(7) 車両管理は、同整備局や出先の事務所が保有する車の運転を、民間業者が燃料代なども含めて請け負う業務｛φ／ダ｝。同整備局によると、毎年 33 件の委託先を指名競争入札で決めており、最近 3 年間は道路興運が 51 件、総合サービスが 24 件を落札した。(9 月 7 日 1 面)

これらの例は「～だが、～」のような形で複文にすることも可能であるが、名詞終止をとることによって、文として独立しながらも意味的には後続文と緊密なつながりをもっている。

名詞終止の用例の中で目立つのが「はじめて」である。今回のデータ中に 16 例あり、量的には際立って多い印象を受ける。しかし「はじめて」も、ダ終止に変えたとしても容認性が落ちるわけではない。

(8) 秋篠宮紀子さま(39)は 6 日午前、東京都港区の愛育病院で帝王切開手術を受け、出産される。皇族で帝王切開を受けるのは初めて｛φ／ダ｝。誕生したお子さまは秋篠宮ご夫妻の第 3 子で、天皇、皇后両陛下にとっては 4 人目の孫となる。(9 月 6 日 1 面)

数値や数量を表す名詞が述語となる例を見てみよう。

(9) 農林水産省は 8 日、外食産業の原産地表示に関する調査結果を発表した。原産地表示の実施率は事業者ベースで 42.5%、店舗ベースで 67.2%｛φ／?ダ｝。多数の店舗を持つ大規模業者を中心に原産地表示が広がっていることをうかがわせる。(9 月 9 日 2 面)

(10) IAEA はイランに査察官を派遣し、核関連活動の現況を調査した。毎日新聞が入手した報告書は 6 ページ｛φ／?ダ｝。(1) ナタンツで濃縮作業を継続しており、その進展は限定的(2)イランの核開発の全容を解明するため一層の協力を求める――ことなどを明記している。(9 月 1 日 1 面)

これらの例は、筆者の語感ではダ終止はやや主張が強く感じられる。名詞終止の方がしっくりくる例である。

ここまでの観察をまとめると、普通名詞を述語名詞にする場合には、量的には名詞終止が圧倒的多数を占めるが、容認性という点ではそれほどはっきりした差があるわけではないということになる。ただし、ダ終止にすると文の自立性が高くなり、そこに書き手の主張が強く感じられるようになるため、後続文

との緊密性が損なわれる可能性がある。そのため、新聞記事においては名詞終止が支配的に選択されるということではないだろうか。

ここでダ終止に目を向けたい。本調査において普通名詞がダ終止をとるのはわずかに 10 例に過ぎないことは先に述べたとおりであるが、普通名詞にあえてダ終止をとらせる書き手の動機は何か考える必要がある。

(11)(12)は普通名詞がダ終止をとる例である。どちらの例も名詞終止には変えにくい例であろう。

(11)加工ウナギの輸入業界で数年前、「検査用の箱を仕込んで検査をパスしている業者がいる」との情報が駆け巡った。大手商社の子会社による台湾産ウナギの国産偽装など 02 年 10 月以降、産地偽装が相次いで発覚していた。だまされるのは消費者{だ／??φ}。検査用箱の「仕込み」は、輸入食品の残留農薬などをチェックする検疫所や検査機関の目をあざむこうとするもので、より巧妙で悪質だ。(9 月 3 日社会面)

(12)県南部、日本海沿岸の同市(＝秋田県にかほ市)は企業城下町{だ／??φ}。市出身のＴＤＫ創業者が「農業だけでは立ちゆかなくなる」と古里を案じ、工場を建設。現在、五つの同社施設があり、市の税収約 30 億円の 2 割を同社の法人市民税が占める。(9 月 6 日社会面)

(11)は当時社会問題化していた産地偽装を伝える記事である。この文脈における「だまされるのは消費者だ」という文には書き手の強い主張がこめられている。このような強い主張にはダ終止が必要であり、述語化語尾が存在しない名詞終止では支えきれないものと思われる。

(12)は(11)とは異なるタイプであり、パラグラフの冒頭に置かれて、それ以降の話題を設定する役割を果たしている。(12)において名詞終止が不自然になることは、このような状況では、述語化形式を脱落させた名詞終止は十分機能することができないということである。名詞終止が有効に用いられるのは、先行する文を受けて、ある種の情報を添加し、強い主張を加えることなく後続文に続けるといった文脈であると考えられる。

5. 2. 形式名詞の場合

形式名詞はデータ中に 45 例存在していた。内訳としては、ダ終止が 27 例

（60.0%）、名詞終止が 14 例（31.1%）となり、ダ終止の方が選択されやすいことがわかる。用例の検討を通して明らかになるのは、用例数の偏りと同時に、形式名詞の語例に明らかな違いがあるということである。なお、本調査の新聞記事には「のだ」「わけだ」のような説明の表現は見られなかった。

ダ終止から用例を見ていくことにしよう。ダ終止をとる形式名詞としては、「-そう」（16 例）を筆頭に、「から」（4 例）、「よう」（3 例）、「もの」（2 例）、「ため」（2 例）といった例が現れる。以下に、「-そう」「から」「よう」の例をあげておく。

(13)固定電話をほとんど使わない世帯も増えているため、固定電話網維持のために多額の基金発動が常態化する恐れもあり、制度見直し論も浮上しそう｛だ／*φ｝。（9 月 1 日 2 面）

(14)今年はまだミャンマーに行っていない。足腰が弱くなったから｛だ／*φ｝。（9 月 3 日社会面）

(15)鳩山氏はその後も「憲法改正にもいろいろあり、違いを競うことが重要だ」と述べ、与野党間の論戦の必要性を強調している。しかし小沢氏の考えは別のよう｛だ／*φ｝。（9 月 10 日 2 面）

これらの例において「だ」語尾は必須的である。文脈に関わりなく、名詞終止は存在し得ないと思われる。助動詞への文法化が進んだ形式であることの現れと考えてよいのかもしれない。

次に、名詞終止に目を向けてみよう。名詞終止をとる形式名詞としては「通り」（8 例）、「ため」（3 例）、「もの」（2 例）、「こと」（1 例）が現れる。「-そうだ」「ようだ」のようなモダリティ形式が姿を消し、「通り」が大部分を占めている。

(16)9 日午後 7 時 36 分ごろ、東北地方を中心に地震があり、岩手県北上市、宮城県石巻市などで震度 3 を観測。気象庁によると、震源地は宮城県沖で約 70 キロ、地震の規模を示すマグニチュードは 5.2 と推定される。震度 3 を観測したその他の地域は次の通り｛φ／??ダ｝。

「通り」の例がダ終止をとると、そこに感じられる強い書き手の主張が文の流れを乱してしまうように感じられる。「通り」は、リストを提示するための前置きをするに過ぎず、書き手の主張を受け止めるだけの意味的裏づけをもたない

からだと思われる。

「ため」「もの」「こと」は、文脈さえ整えば、ダ終止も名詞終止も可能な名詞である。「ため」「もの」は本調査でもどちらの終止語形にも用例があったし、「こと」は名詞終止しか用例はなかったものの、ダ終止でも十分に可能である。名詞終止の例で次に示すが、ダ終止に変えても容認性に問題はない。

(17)インターネットで簡単に申請できる電子申請システムを、高知県が利用低迷を理由に今年3月末で運用を休止していたことが分かった。単純計算で、申請1件当たり平均194万円の管理費がかかるため｛φ／ダ｝。同システムの休止は都道府県では初めて。(9月6日社会面)

(18)現行の基準金利は、日銀のゼロ金利解除に伴う長期金利の上昇で11年3ヶ月ぶりの高水準になっていた。今回の引き下げは、日銀の追加利上げ観測の後退で長期金利が低迷していることを受けたもの｛φ／ダ｝。(9月2日2面)

(19)取り組みの狙いは、子どもために、離婚した親の意思疎通を図ること｛φ／ダ｝。面会後に再びカウンセリングを行い、親同士のコミュニケーションの取り方などについてもアドバイスする。(9月4日1面)

これらの形式名詞は「-そう」「から」「よう」に比べると自立性が高いために、名詞終止も許容するのではないかと思われる。

5. 3. 文末名詞の場合

本調査で得られた文末名詞は 94 例を数えた。ダッタ終止を除いた内訳はダ終止が28例（29.8%）、名詞終止が63例（67.0%）であり、量的には名詞終止が圧倒していることがわかる。しかし、用例の検討から明らかになることは、ダ終止と名詞終止では文末名詞の種類がかなり異なるということである。以下、具体的に見ていくことにする。

ダ終止で使われる文末名詞には、用例が多いものでは、「模様」（5 例）、「考え」（4例）、「形」（3例）といったものがある。一方、名詞終止は「疑い」（26例）、「見通し」（7例）、「方針」（6例）、「予定」「模様」（5例）といったところで、特に「疑い」に用例が集中しているのが目を引く。

この「疑い」から用例を見ていくことにしよう。「疑い」は名詞終止のみで、

ダ終止の用例はなかった。

(19)調べでは、三男は 2 階の勉強部屋で、窓を閉めようと入ってきた母親を金属バットで後ろから 1 回殴った疑い｛φ／??ダ｝。隣の部屋で寝ていた父親(48)が悲鳴を聞いて駆けつけ、バットを取り上げた。(6 月 5 日社会面)

この名詞で名詞終止とダ終止に明確な偏りが出る理由ははっきりしない。あるいは「疑い」は文末名詞ではなく、「～（という）疑いがある」のような表現における述語省略と考えて、名詞型述語からははずすべきかもしれない。そのような処理が適切なのだとすると、文末名詞においてはダ終止と名詞終止の使用例数は拮抗することになる。判断は保留する。

次に「形」の例を見よう。「形」はダ終止のみで、名詞終止には見られない形式である。

(20)福田氏の出馬辞退後は麻生太郎外相と谷垣禎一財務相にどう支持が分散するかが焦点だったが、今回の調査結果を見る限りむしろ安倍氏の独走が強まっている。世論支持と党内支持が相乗効果で増幅した形｛だ／??φ｝。(9 月 8 日 2 面)

「～形だ」は「のだ」と類似した説明の機能をもつとされ、本調査の結果では「のだ」は新聞記事には存在しなかったが、「形」がそれと類似した機能を果たしている可能性がある（「形」については佐藤(2006)が詳しい)。先行文脈をまとめるように解説的に使われる形式であり、このような機能は名詞終止のような情報を添加するような語形ではなく、書き手の主張を強く打ち出すダ終止でないと受け止められないということだろう。

「模様」についても用例を観察する(「模様」については佐藤(2004)が詳しい)。「模様」は「ようだ」に近い意味をもち、本調査においてはダ終止、名詞終止ともに例が見られる。

(21)イラン北東部のマシャド空港で 1 日午後（日本時間同夜)、イランエアツアーの国内線旅客機（ロシア製ツポレフ 154）が着陸に失敗し炎上、国営イラン放送によると、乗客乗員約 150 人のうち 28 人の死亡が確認された。死者は最大で 40 人を超す可能性がある。外国人乗客はいない模様｛φ／ダ｝。(9 月 2 日社会面)

(21)の原文は名詞終止であるが、ダ終止でも十分自然に感じられる。「模様」は記事の中核的な情報の直後に置かれ、補足的な情報を添える機能をもっている。また、意味的な類似性を指摘されることがある「よう（だ)」は名詞終止で用いることはむずかしいが、「模様」は名詞終止でも問題なく用いることができる。これは、「よう」に比べて「模様」の意味的な実質性が高いことに起因するものと思われる。

ここまでの文末名詞についての観察をまとめると、名詞による個性の違いが際立っているということになるだろう。「疑い」のように名詞終止に偏るもの、「形」のようにダ終止に偏るもの、「模様」のようにどちらも自然なものといったように文末名詞の性質によって終止の語形の選択はさまざまである。

5．4．性状名詞におけるダ終止と名詞終止

性状名詞はナ形容詞語幹と接尾辞「-がち」を入れる枠組みとして設定したものである。便宜的な分類であり用例数も少ないので、ここでは簡単に触れるにとどめたい。

本調査中のデータには性状名詞は 17 例存在した。ダ終止は 8 例（47.1%)、名詞終止は 7 例（41.2%）と使用例数は拮抗している。ダ終止は文を明確に切ることで書き手の主張が打ち出されやすく、名詞終止は文を明確に切らず情報を添える機能をもちやすいという傾向はこれまでに見てきた他の名詞と同様である。

(22)安倍氏周辺には年内の訪中・訪韓を模索する動きもあるが、安倍氏は首相就任後も靖国神社を参拝する可能性を否定しないため、首脳の相互訪問を再開できるかはなお不透明｛だ／??φ｝。(9 月 5 日 2 面)

(23)県南西部、日本海沿岸の同市は企業城下町だ。市出身のＴＤＫ創業者が「農業だけでは立ちゆかなくなる」と古里を案じ、工場を建設。現在、五つの同社施設があり、市の税収約 30 億円の 2 割を同社の法人市民税が占める。65 歳以上の高齢者が 4 分の 1 を超え、秋田市から車で 1 時間以上かかり交通インフラも不十分｛φ／?ダ｝。それだけに、市民のＴＤＫとチームへの思いは強い。(9 月 6 日社会)

6. おわりに

本稿では、ダ体を一貫して用いるテキストとして新聞記事をとりあげ、10 日間の新聞記事に対して実施した調査のデータにもとづいて量と質の両面から分析を行った。結果は次のようにまとめることができる。

１）新聞記事は、デアル体を用いないという点でダ体で一貫したテキストだと言えるが、数量的にはダ終止やダッタ終止以上に名詞終止が多い。

２）名詞の意味の観点からは、普通名詞は名詞終止に偏り、形式名詞や文末名詞はダ終止に偏る傾向がある。

３）ダ終止は文を明確に切ることによって書き手の主張を表しやすく、名詞終止は文の切れ目を弱くすることによって、付加情報を添える役割を果たしやすい。

参考文献

安達太郎(2017)「ダ体の意味―山田美妙のダ体作品を中心に―」『京都橘大学研究紀要』43:1-13

佐藤琢三(2004)「「模様」の報告用法について」『国語学』55-4（219）:73-84

佐藤琢三(2006)「名詞カタチの文末用法と説明の機能」益岡隆志他編『日本語文法の新地平 3　複文・談話編』137-153、くろしお出版

司馬遼太郎(1976)「文章日本語の成立と子規」『子規全集』第 13 巻月報、講談社（『歴史の中の邂逅 7』（文春文庫、2011 年）に収録）

新屋映子(1989)「“文末名詞”について」『国語学』159:1-14

角田太作(1996)「体言締め文」鈴木泰・角田太作編『日本語文法の諸問題―高橋太郎先生古希記念論文集―』139-161、ひつじ書房

野田尚史(1998)「「ていねいさ」からみた文章・談話の構造」『国語学』194:1-14

（京都橘大学教授）